

道真の七百日—ただ今し秋

今 泉 晴 行

Les Sept Cent Jours de MITIZANÉ I

IMAIZUMI, Haruyuki

はじめに

道真の詩境は太宰府の謫居において、その極みに達したという。それはみづからに沈潜し、生存の分水嶺を生きた一人の人間の呻き、叫びである。

昌泰四年正月二十五日以降、記録に残る限りの道真の出处、立居をみていると、遠い昔、オリエントの地で語られた《苦難の僕》の詩(うた)を髣髴とさせられる。

「彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。」(イザヤ 42,2)

「わたしは思った。

わたしはいたずらに骨折り、

うつろに、空しく、力を使い果たした、と。」(イザヤ 49,4a)

「わたしは逆らわず、退かなかった。

打とうとする者には背中をまかせ

ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。

顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。」(イザヤ 50,5b~6)

「かって多くの人をおののかせたあなたの姿のように

彼の姿は損なわれ、人とは見えず

もはや人の子の面影はない。」(イザヤ 52,14)

「見るべき面影はなく

輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

彼は軽蔑され、人々に見捨てられ

多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し

わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

彼が担ったのはわたしたちの病

彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに

わたしたちは思っていた
 神の手にかかり、打たれたから
 彼は苦しんでいるのだ、と。
 彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり
 彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。
 彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ
 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」(イザヤ 53.2b-5)

当時生き死にした人々の様々な想いが 道真 に集約したのであろうか。無論、道真に全く落ち度がなかったわけではない。寧ろ道真の政治性、社会性の薄疎なことも事態の発生基盤にはあったと思われる。しかし、その無邪気なほどの政治的配慮の希薄性故に、不平不遇の貴種、公卿、文人、官吏など種々の地位立場の様々な人々の複雑な思いが道真の上に結集したのではないだろうか。道真が上訴された事においても、おそらく彼に咎はなかったであろう。その道真が滴落されて行く姿と《苦難の僕》との間に重なる一面を見てしまうのである。

I. 菅家後集

謫所で記され残されたのは僅か三十九首である。この三十九首を現代の日本語に読み解きながら道真の心の軌跡を辿りたいと思う。

太宰府で記された「後集」は、岩波古典文学大系(川口久雄校注)の番号付けでは、「五言 自詠」と題された476番からである。「476」と番号が振られたこの詩は配流の落胆からか、旅の疲れからか、ほとんど修飾がなく簡約である。簡素だけに却って彼の真情が伝ってくる。「すべては夢、幻の如し。ただ遠く蒼空をみつめるしかない」。「後集」の巻頭に配置されるにふさわしく、「後集」全体を貫く主題が凝縮された形で示されている。

476 . 自詠。

家を離れて三四ヶ月
 落ちる涙は百千行
 すべてが夢幻のよう。
 時に応じて彼の蒼(そら)を仰ぐ。

つづく「七言」で「白子」に擬えて心衷を垣間見せる。「詩友獨留眞死友」。「詩友」は「死友」、それは道真の同音異義語の もじり にしては切実感が漂う。《死》の予感が既に彼の脳裏を掠めていたのかもしれない。

477 . 詠樂天北窓三友詩

白氏洛中の集十卷
 その集に《北窓三友詩》がある。
 一の友は弹琴。また、他の一友は酒。
 酒と琴は、いまのわたしには関わりがない。
 わたしには関わりがないといっても、その意(こころ)はよく知っている。

嘗てその意(こころ)を確かに深く知った。
酒は何を以て成すかという、麴に水を容れて醸造する。
琴は何を以て作するかという、桐に播(ほどこ)す。
煩わしく手を動かして琴で一曲を奏することはない。
酒と琴がなぜ必ず眉を開いてくれると言えるのだろうか。
しかし、いまは、二者との交情は深くはなく、浅い。
去るなら去ればよい、わたしは懇ろに別れを告げよう。
詩友は一人だけ残る、《死》という真(まこと)の友が。
我家管家には、父子孫々久しく約定がある。
避けることは、人々の口の端に上ること。
声には出さず、心の中でひたすら想う。
配謫という身である故に、心も縛られ、新しい意(こころ)は湧かない。
口に浮かぶ古詩を摘(ひろ)う。
そして、古詩を閑かに抄出する。
官舎は三間、白い茅と茨で屋根が葺かれ、
しかし、狭くとも南北は配慮されている。
建て付けは粗雑だが、一応、窓も戸も附いている。
謫家に充てられた家屋には北に窓が開いた部屋がある。
時たま良友が訪ね来て、我が身に寄り添ってくれる。
酒もなく琴もなく、充分あるものといえれば何か。
燕の雛と雀の児。
燕と雀、種は異なるものの、生を遂げることに於いては同様である。
親の雌雄が互いに協力して雛児を養育している。
鳥たちはこの家に慣れ、焼香散華のところや
念佛読経の時には、違えず必ずやってくる。
知らなければならぬ、焼香散華や念佛読経を嫌っていないことを。
更に知る。障りがあるわけではなく、機縁となるわけでもない。
ただ、かしましく鳴き囀るだけである。
しかし、彼らは一虫一羽といえども、雛児を餓えさせることはない。
これらの微禽に比して、私は儒者であるはずなのに、
彼らの雛児に対する慈しみ溢れた振る舞いに遠く及ばない。
長男尚書右丞は、下降されて土佐に
次男吏部郎中は、同じく越後の国へ
三男侍中は、殿上を排され遠江へ
四男秀才は、播磨の国に
勅使が彼らを搦めるように連れ去って行った。
親と子が五個所に散々になってしまった。
言葉にすることは叶わず、眼に血を滲ませるだけであった。
何も言えず、ただ天神を仰ぎ、ひたすら地祇に俯(ふ)し拝むのみ。
東に西に、雲は眇眇(はるばる)。

二月三月、陽は遅遅(うらうら)、
 この地は遠く幾多の関を隔て、京からのたよりも聞こえず。
 謫居暮らしは辛酸を極め、夢を見るどころではない。
 左降され西行するに連れ、山河を遙か遠くに隔て、
 風景は黯然と、徒らに路行に従い移り変わるだけ。
 何事もなく謫所に着いても、誰と共に食を楽しむ。
 生きて秋風を知るとしても、暖衣も手元にはない。
 古の三友は、一生の喜びである。
 今の三友は、一生の悲しみである。
 昔は今とは異なる。

一方は悲しみ、片方は楽しみ、しかし、それはそれで同一なのかもしれない。

また、「身多忌諱無新意」、配謫の身では憚りがあり、自由な詩興が湧き上る心境からは遠かった。

「酒もなく琴もない」流謫の身にとって、無為無聯を慰めるものは、時折「相依る」詩友のほか、「紫燕の雛」と「黄雀児」だけであった。道真の孤独の深淵が垣間見える。その孤独な心は更に所思を深める。燕や雀は種を異にしているが、同じくその与えられた生を十全に果たすために、「雌雄擁護」して互いに助け支え合っている。その鳥たちが、道真が行う「焼香散華の處」「念佛読経の時」を時処違えないで嫌がりもせず居並び、道真の落莫たる日常を慰問する。その小さな鳥たちですら、雌雄相助け支え合って、その雛が飢えないように養い育てている。それに比して、「我」は人に道を説く儒者でありながら、微禽たちの足元にも及ばない。更に道真は遠く追憶に沈む。昌泰四年正月二十五日、突如勅使が来襲し四人の息子を取り押えるように連れ去り、一瞬の裡に親子が五個所に離散してしまった。その心衷は筆舌を絶し、ただ眼だけを赫く充血させていた。ただできることは、「天神」と「地祇」を「仰ぎ俯む」ことだけである。人智、人力の及ぶことではなく、ただ祈念するしかできることはなかった。この太宰府という配流の地は京から関を幾つも隔て、いまは知人知己からの消息も絶え果てた。そして、夜は煩悶し、夢を見ることさえ稀有である。

謫行して行くにしたがい故郷は遠く隔たり、眼に映る山河風景も黯然と眼前を流れて行った。何とか事もなく、謫所に致着することができたが、当然ながら其処には誰も待つ者も居ず、食するのも独りである。また必死の思いで生き延びて秋を迎えても厚手の衣類もない。

478不出門 七言

一旦謫落されて陋屋に住み
 肩身が狭く居場所もなく、死を懼れおののく。
 都府楼は瓦だけの様が僅かに望まれ、
 観世音寺は鐘の聲だけを響かせる。
 心の中は空しく、孤雲と共に流れ去り
 時は流れ世は巡り、満月を迎えている。
 この地では、身を縛られ繋がれることはなくとも、
 門を出でて、寸歩も踏み出す気に何故かならない。

また「不出門 七言」と題された詩には、謫落されて柴の戸の陋屋に住するようになってから、「万死競々」で、何処にも自分の居場所がない道真の真情が吐露されている。そして、よく知られた

「都府櫻纒看瓦色

観音寺只聴鐘聲」

がつづき、道真の心は「孤雲」に従って流れさり、空虚そのものであった。この身は緊縛されることはないが、門から寸歩も踏み出す気にもなれない。道真の居所は、土地伝承では「南館」跡と言いつたえられている。

479. 讀開元詔書 五言

黄紙に記された開元の詔、
 延喜という年号が一般庶民に示された。
 今年が辛酉の歳に当たるためであり、
 また、ひとつは老人星のためである。
 死刑以下の罪を蕩(あらいなが)し濼(すす)ぎ、世は澄む。
 徭役を省き壯力を優す。
 物を与えて老人を恤(あわれ)む。
 恩徳の海は際限がなく果てしない。
 ただ独り悪の権化鯨鯢が横たわる。
 (具に詔書に見られる)
 なぜこの魚の名がここに出てくるのだろうか。
 人は言う、「汝の新しい名だ」と。
 舟を飲み込んでしまうのは、私の口ではない。
 浪を吐くのは、私の聲ではない。
 なんと哀しいことであろうか、放逐された者は。
 躓き倒れ、私は精霊を喪失してしまった。

「讀開元詔書 五言」では、果てしない恩徳の海の中で、害を為す「鯨鯢」と名指しされながら、「放逐」された身では、弁明する術もなく気力さえ失せそうであった。

480. 聞旅雁 七言

私は流されて来た者であるが、汝は来賓。
 しかし、双方とも共に旅に漂い生きる身である。
 枕を藪(そばだ)てて歸去する日を思量する。
 わが帰還はいつれの歳か知らないが、汝は明春。

「聞旅雁 七言」においては、雁が「来賓」であるに比して、道真は放逐流罪に処された身。旅愁に浸り、過ぎ去って二度と帰らない日々を想い起してみる。「雁よ、お前は来春は必ず帰郷できるのに、わたしはいつになったら京へ帰ることができるのだろうか」。渡り鳥に擬して、心情を展(の)べる。

481. 九月九日口号 五言

この日は九月九日、重陽の節句
 眼を閉じて独り物思いに浸り臥している。
 長寿を祝う菊の酒は誰のために用意しようか。
 ただ、長く行ってきた精進齋戒は破らない。

「九月九日口号 五言」には、道真の心底が如実に示されている。重陽の節句の日であるが、菊の

酒を用意する事もなく、眼を閉じ独り愁いに沈み臥している。誰のために、長寿を願う「菊酒」を用意するのか、何のための長寿か。川口久雄氏の注釈によると、「長期間の不断精進の勤行を怠りなくつとめて、来世をひたすら祈るばかりである。」(註1) 我が長寿を祈る「菊の酒」など用意する気にもならず、ただ独り、起き上がる気にもなれず、床に身を横たえている。願うことはひたすら来たる世に向けての精進だけである。

482. 九月十日

去年の今夜は清涼殿に侍していた。

[御在所の名である。]

秋の思いの詩篇、独り臑(はらわた)を断つ。

[勅賜し秋思を臑(うた)う。詩だけが冗濫して、憂憤する所を述べる。]

恩賜の御衣は今此処にある。

捧げ持ちて毎日餘香を拝する。

[宴終り晩頭に御衣を賜う。今も身辺の行李の中にある。故に言う。]

昨「九月十日」は「清涼」で天皇のお側に座していたが、今年のこの日は遠く離れた異郷の地で、はらわたを断ち切るような思いでいる。ただ、御恩の深さを思い起しながら…。

483. 慰少男女。 五言。

多くの姉たちだけが家に留め置かれ、

幾人もの兄たちは謫され去った。

いま此処に共にいるのは少(おさな)き男の子と女の子

彼ら二人の子とは絶えず共に居て語り合うことができる。

昼、食を摂る時に眼前にいる。

夜、床に就くのも同所であり、

暗い時には燈燭がある。

寒い時には暖衣がある。

過ぎ去りし時、窮迫した子供を垣間見た。

都で寄る辺を失くした子女たちである。

裸身で博打を打つ者、

往来で南助と呼ばれる者、

[南大納言の子、内蔵助は博徒となり、いまなお南助と号(なづ)けられている。]

裸足で琴を弾く者、

街中では《弁の御》と呼ぶ。

[俗に貴女を御と呼ぶ。夫人女御の義ではない。藤原氏で弁官を兼ねた者の娘]

彼等の父は共に公卿にして、

往時は少々驕り倨(おご)っていた。

昔は金に糸目をつけず砂土のように扱い、

今は饜(あ)き足りるほど飲み食いすることはないであろう。

お前たちを彼らに引き比べてみると、

天はお前たちにまだ寛恕なのかもしれない。

また、みづからの子弟に触れた五言もある。補注483 - 2には「男女御子息廿三人の中、男子四人は同四方に流され、おとなしくおはしましけるひめきみは京のうちにとどめをき、いとけなくおさなき君達うちぐして出給し」と、「北野根本縁起」を引いている。「慰少男女。五言」本文にも、多くの年嵩の娘たちは家に残り、幾人もの兄たちは配謫され、幼き男の子と女の子だけが同伴することを赦された。食事の時は絶えず眼前におり、夜間は同じ屋根の下に眠ることができる。京に残る娘たち、流されて行った息子たちのことも心に懸るが、眼の前にいるお前たちが不憫で仕様がな。遠く都を離れ、まだ母親が恋しい年端も行かぬ「少男女」を看ていると、心が搔き毟られるほど痛ましく感じられる。しかし、日が落ち暗闇が迫っても、まだ僅かながら燈燭も灯すことができるし、寒くなれば綿入れの暖衣も辛うじてある。道真の憂慮は拡がる。嘗てみた南大納言の子が「南助」と呼ばれ博徒に落ちぶれ、また「弁の御」といわれ履物も無しで洗足で琴を弾く、昔は驕り暮らしたさる公卿の子もいた。「我が子たち」は、不足な事だらけだろうが、まだ多少は救いがあると思っしてほしい、と小児たちを労りながらみづからをも慰めることしかできない。

484. 叙意一百韻 五言

生涯、定まれる地はなく、
 ひとの定めは天のみぞ知る。
 職をまさか西の府に求めたことがあつたらうか。
 名が何故に左遷ということに替わってしまったのか。
 貶し降されて、芥よりも軽く、
 駈り放たること、弦(ゆみ)のように急であった。
 恥ずかしくて赤面を重ね顔の皮が愈々厚くなり、
 狼狽(うろた)え取り乱し、踵を旅(かえ)すのも赦されないほど情容赦ない。
 私にとって牛車の轍さえ陥穽(おとしあな)となり、
 鳥の通り路に鷹や隼が待ち受けているような有様だ。
 老僕は絶えず杖に助けられ
 疲れた添馬には鞭をいれる。
 岐れ路に臨んで、腸(はらわた)が絶ち切れ、
 御所の門を望んで眼が穿たれるようだ。
 落る涙は朝露と見紛い、
 我が啼く声は、杜鵑(ほととぎす)の鳴き声を乱してしまう。
 通り過ぎる道すがらの街々は塵埃が掩蔽し、
 原野には草々が繁茂している。
 駅停は蹄の傷んだ馬を送り、
 港江は尾の痛んだ舟を迎える。
 宿駅は五十足らず、
 里程は三千の半ば。
 輓を外したのは南楼のもと、
 車を停めたのは右郭のほとり
 あたかも小さな門扉を開いたかのように、
 覗き観る者が、南北に渡る道に溢れる。

嘔吐しても猶も胸はむかつき、
虚勞して脚もまた萎えた。
皮膚には幾多の皺が切り刻まれ、
精魄は如何に磨研してしまったことか。
宿を重ねても、旅の空、
面を伏せ彷徨うのは、逆さ吊りの苦しみ。
村の古老が往時を語れば、
旅の宿の明け暮れの憂さを暫し忘れる。
妖害を如何に避けることができたろうか。
されど、悪名は最期には払拭したいものだ。
いまだ嘗て邪は正に勝ったためしはなく、
また、実を以て権に帰しむと…。
空疎な官舎に移り住み
古朽した松の椽(たるき)を修理する。
庭は荒涼として、歩く道さえ消えているが、
敷地は広大ではないが然るべき地積はある。
井戸は塞がれていたが、砂を積み敷(いしだたみ)を敷いた。
籬(まがき)は疎らで荒れ破れ、割竹を編んだ。
陳(ふる)き根の葵(わさび)が一畝、
拳大の石に藓(こけ)が斑(まだら)に附いている。
家の佇まいに舊(ふる)き残映が揺らぐ。
新たに人が居住しても儼(あらたま)らない。
時が経つにつれ穢(せま)さを痛感するが、
何よりも己が何とか安便に過すことだけを願うばかり。
病を同じくする朋友を求め、
配謫の憂いを助けてくれる先人を訪ねる。
才は終極身を助くものとも限らない。
富は元々変転するものである。
傳説の築は巖の傍で二人して杵を振るっていた。
范の舟は湖上に浮かぶがささやかなものだ。
長砂の砂は卑(ひく)く湿気を帯びている。
湘水の水は巡り流れる。
官位だけ空しく高くされたが、
役職はただの数合わせのようだ。
旧友は俵しい食から分ち与え、
親族は汚れた衣類を洗い清めてくれた。
予てから生き辛い生を折に触れ慰め励ましてくれた。
何故、嫌うことがあろうか、死の濫(すみや)かでないことを。
日々の食も天に賦与されたもの、
忖度は陶甄に委ねる。

時が移り春が尽きる。
 陰曆四月、初夏の光が妍(うるわ)しい。
 鄙の土風に慣れ親しみ
 習俗に添い則っていこうと思う。
 苦みを取り去るためであろうか、塩を摂るのに木を焼き、
 阿漕な商売をして、布を銭に当てる。
 いとも簡単に人を殺傷し、
 群盗が堂々と横行している。
 官吏が昼間から魚釣りをして遊び、
 竹筵を換えるとき舷(ふなばた)を叩く。
 貪婪な人間は米を販(あきな)い暴利を貪り、
 偽物を商い官に物品を没収された。
 鮑商いの肆(みせ)には強烈な臭気が残り、
 琴の音はいつまでも弦を改めていない。

[以上の十句、習俗の変わらないのを傷む]

誰と共に口を開いて語り合うか。
 誰も居るわけではなく、ただ独り肱を曲げて横になるのみ。
 陰鬱な五月雨が打ち続き鬱蒸な気分に沈み、
 朝ごとの炊飯も途絶えがちである。
 雨が多くて魚の姿と見紛うほどに竈や釜に水が溢れ、
 また、蛙の鳴き声が階の敷き瓦のあたりでかまびすしい。
 農夫の子供たちが野菜の類を持ち来て、
 手伝いの子供が薄粥を作ってくれる。
 痩せているのは連れあいを失(なく)した鶴のようで、
 飢えているのは雛を守るに暇がない鶯のようである。
 壁が破れその土が水が流れ込むのを防ぎ、
 庭には泥が溢れ濁水が水の道を成す。
 赤い日輪が空に輝き反照を残して沈み、
 幕のように重く垂れ下がっていた霧も上がり、
 折に触れ心の有り様によって時に光も見える。
 談笑しているうちに、時に玄妙な境域に到ることもあり、
 また、佛陀が生れ変り、老子になったという物語も開く。
 だが、荘子の生き様は、偏りが強い気がする。
 人の生来の傾きは、自然に乖(そむ)くことはなく、
 大元は在りのままに生きることであろう。
 荘子の齊物論は私にとって心に沁みるものがあり、
 同じく寓言の篇は、私の心を和らげ潤してくれる。
 その深遠な思想は夢よりも幽かな気がする。
 風情の中に埋没しがちな性情は未だ治らない。
 文の華はどこから舞い降りてくるのだろうか。

私の心はこの惨状にも興味を覚えている。
 馮衍を想い起こし、自分の心を慰めようとし、
 仲宣を読み直し、自己の憂いを銷(け)そうとする。
 詞を拊(つく)み、忌諱に触れることを恐れ、
 筆が摺り切れ精緻から遠く離れ、粗々しさに惑う。
 詞詩の下書を誰が共に見えてくれ、
 詩句に誰が連句を付けてくれようか。
 詩想を得ては紙に記してはみるが、
 詠じて燈に翳して焼き捨ててしまう。
 反覆常ならぬことを、何で恨みに思うだろうか。
 人の世の辛酸は、予め定められた宿縁。
 徐々に愛欲や楽しみを抛げ捨て、
 徐々に生臭い食物を謝絶する。
 合掌して佛に帰依する。
 そして、回心して禅を学ぶ。
 今の私の罪業を厭離し、
 古の佛の悟りを恭敬する。
 空の真理は皎潔で、
 蓮は真理を開き示す。
 菩薩の誓願は弘く、裏切られることはなく、
 極楽の幸福は厚く、無駄に終わることはない。
 暑夏熱悩の煩いは、纒(わづか)に薄れ、
 新涼の到来は、必ず過ることはない。
 灰を飛ばして季節を占い、
 北斗の指示で天の運行が決まり、
 世俗との関係は増々険しい。
 家からの書簡は絶えて届かず、
 痩せて帯が緩み、服の紫色も褪せてしまった。
 鏡に映して白く霜が降りた頭を歎く。
 旅の空の想いは雲を切裂いて駈ける雁。
 寒々と泣き叫び、必死に木肌にしがみ附く寒蝉。
 咲き誇る蘭の香りも奪われていく。
 京を離れ、九度、月の満ちるのを見た。
 部屋を清め、仏具の磬を整えて初めて心がいささか安らく。
 門の扃(かんぬき)を外し鍵を開けるのも嫌(ものう)い、
 躑(あしなえ)の羊は、更に繫(あしかせ)を付けられている。
 瘡(きづつ)ける雀は、加えて攀(てかせ)さえ付けられている。
 無性に垣根の外の景物を見たくて、
 偷(ひそ)かに戸窓の所に行く。
 山は遙か纒(はなだ)色に映え、

水は遠く水音を立て流れている。
 瘦せ衰えた身ながらも辛うじて生き延びて、
 とりわけ勞りもしないのにこの命を永らえている。
 身体が抜け殻のようになり、魂は放心自失
 眼想いし臉の奥に京の事々が浮び、涙は止めどない。
 故郷の京に帰ることができるのはいつの日か。
 家の庭園に戻るることができるのは何時の年か。
 思い起してみる、初めて宮仕えした日のことを。
 遡り計えてみる、昔から義理を究めようとしたことを。
 試験に及第するよう力の限り尽くしたことを。
 政治の要諦を学んだことを。
 試験に桂の一枝を折ったことを。
 讃岐の地で行政に勤しんだことを。
 父祖伝来の儒林で高峰を成すことができ、
 地方での奉務も銚(はか)り認められた。
 栄転栄達は、限りなく照り輝き、
 栄冠栄誉は、極まりなく身に纏う。
 責務は千鈞の石よりも重く、
 明け暮れ、万仞の淵に面す。
 衆人は私が大将大臣を兼ねたことを見て、
 満座の人々が功勞功業に缺けていると言う。
 私はいたずらに錦を傷つけないよう心を砕き、
 そして、甲斐無く刀を折らないように慎んだ。
 恐れかしまり御座の御側で奉仕し、
 慎しみ敬い天子にお仕えした。
 汚濁塵埃に塗みれた俗世から屣(くつ)を脱ぎ、
 内裏に務め、公卿と襟を交えた。
 花の宴、宵越しの宴、
 菊酒、後朝の宴。

[宮廷の宴に絶えず侍した。]

器は拙ないのに、豊かな恩寵を承わり、
 才乏しきにも、大任を任された。
 お承けした大恩に未だ報いることができず、
 溝壑に填(うず)まれることを恐れている。
 藩岳という役人が西に旅したのは、家を忘れたからではなく、
 張衡は田を耕作することを廃しはしなかった。
 高く秀でた樹木は風が摧(くだ)き、
 膏を煎って燈が滅してしまう。
 私を配謫した輩は、無闇にその官位に恋々と執着することであろうか。
 如何にしたら篤実な人間がその生を全うすることができるのか。

彼らは巢を覆して殻卵まで憎むのであろうか。
 穴を捜し求めて蜥(ありのこ)や蝮(いなご)を詰り咎める。
 わたしに下された処断は、金科玉条が厳しく定めることよりも過酷で、
 わたしの果たした功績が記録に残されることは、もはやあるまい。
 忠臣と成らざらむことを悔む。
 罰の戈鋌(やいば)よりも痛ましく悲しい。
 流謫の居所は茅葺きの粗末で小さく、
 碧海の汀の陰惨な荒れた家屋。
 されど、わたしはわが庵に充足し、
 この異境の地でわが生命を終焉させなければならないのか。
 たとえ私の魂が故郷を偲ぼうとも、
 わが遺骨が異土に葬られることがあっても…。
 ひとの境遇は糾(あざな)い纏(まと)わり交わるもので、
 命の行く末を筮簪(うらない)に問うまでもない。
 わが心衷を千言の詞の裡に叙べるとも、
 誰が一度でも不憫に感じてくれるであろうか。

次に、高評を博している「叙意一百韻。五言」である。ここには「昌泰四年正月二十五日の出来事」以後の道真の心情が叙述されている。道真は「塵芥より軽く貶し降され、弓矢のように追立てられ放謫」された。鉄面皮になるほどに赤面を重ね、周章狼狽し、また踵を廻らず暇も与えられなかった。いよいよ京を出る岐路に当たり、都を振り返り見て、万感が込み上げ、内臓(はらわた)が搔きむしられ絶えてしまうような想いで、穴を穿つほどじっと凝視(みつ)めたことであろう。

我が身に降り懸った正体不明の解せない災厄は如何ともしがたいが、汚名はいつの日か晴らしたいとひたすら祈念した。

太宰府まで「宿駅は五十」を重ね、「里程は三千に半ば」した。駕を解き放ち車を停めたのは、「右郭のほとり」であった。謫所の官舎、並びにその周辺の描写には、修辭的な一面も窺えるが、当時の実状・実態を知ることが可能にしてくれる。道真が新しく住むことになっても、建物の様相は旧態依然、嘗てのままである。実際に住んでみると褊狭と感じるが、なによりも自分が慣れ親しみ落ち着いて「安便」に生きていく事の認容を命(ねが)うだけである。また、同病相憐れみ、語り合う事のできる「朋友」があればとも思う。しかし、幽閉の身の上では、我が身と同じく流謫の憂き目を見た先人を《訪ねる》しかない。

才能や富貴の無情転変を述べ、一連の出来事以来、無常感に苛まされていることを表白している。そして古くからの友垣や親族は想いを懸けてくれ、生き辛い人生の端々で道真を支え慰めてくれたと述べている。それ故、何故に嫌うものだろうか、「死の過(すみやか)ならざることを」。

春が過ぎ初夏を迎えれば、そろそろ京の習俗も忘れ、土地の習わしにも馴染んでいかなければならない。その後は太宰府近辺の描写がつづく。この十句では、まだ土地に対して違和感が先行している。なかなか道真が新天地に馴染めない事を物語るものである。それはこの十句のすぐ後にみづから語っている。新しい土地にはまだ親しめず、胸中を語り合う人もなく、ただ独り肘枕で不貞寝するだけである。外は五月の陰雨が鬱陶しく間断なくうちつづき、湿気が多く、気分は陰々滅々に沈む。また炊飯の支度も煩わしく感じられ、それを形容する二句は諧謔を漂わせている。それ故か、自分は「雌鳥

を失へる鶴」のように痩せ細ってしまったとある。その後、対句で「壁」と「庭」のすさんだ実様が
つづく。やがて夕刻になると、鬱陶しい長雨も上がり日輪が差し込み、垂れ下がっていた重苦しい雲
の幕も巻き上げられ、青空が拡がっていく。住環境、とりわけ気候、天候は、ひとの精神状態に大い
に影響を与えるものだが、道真はそれに振り回されたり左右されることを乗り越え、超然とした心境
を形作っていくことの大切さに触れている。また、

「性は常道に乖（そむ）くこと莫し
宗は當に自然に任すべし
慇懃なり 齊物の論
洽恰たり 寓言の篇（註2）」

と、太宰府では莊子にも心を動かす。莊子の真理は幽遠であるが、道真が《花鳥風月》に心を動かさ
れ詞を詠む性情習癖はいまだ如何ともしがたい。

「風情 癖痊えず
文の華は何れの處よりか落ちむ（註3）」

天性の詩人である道真の真骨頂なのかもしれない。詩人であることを厭いながら戸惑いながらも真
底から抜きがたく詩人であった。道真の感性も詩人であることを止めなかった。しかし、彼には詩句
について語り合う詩友は一人も手近にいないし、出来上がった詩句を詠んで興じ合ってくれる友人も
いない。詩想が浮かび紙に書き付けるが、詠み終ると燈に当てて焼却する。

そして、心は切り換わり、教的な思念が登場する。

「一栄一落（註4）」、「何ぞ恨みを遣さむ」
「辛酸是宿縁」

そして、

「微々に愛樂を抛つ
漸々に葷臙を謝す
合掌して佛に歸依す
廻心して禪を學習す
厭離す 今の罪網
恭敬す 古の眞筌
皎潔たり 空觀の月
開敷す 妙法の蓮
誓い弘くして誑れたる語なし
福厚くして唐捐ならじ
熱腦の煩ひ 纔に滅ゆ
涼氣の序 愆つこと罔し（註5）」

ここには気持ちの有り様を考え、食する物にさえ縛りをかけようと心を配り、身心ともに整えていこ
うとする姿勢を読み取ることができる。手を合わせ「佛に歸依し、回心して禅境に入りたい」、「罪の
網から離れ、釈迦の悟りにあやかりたい」と語る。森羅万象すべて空であり、佛の救いはだれ一人漏
れ落ちることなく及ぶという。それ故か、道真を煩わす熱腦は僅かだが弱くなっていくようだと記さ
れている。帰京の《希望》と共に《諦念》が僅かに頭を擡げている。

ここで仏教的詩句は終わり、夏の叙述に移る。そして一転、みづからの境遇に記述は及び、
世の動きから懸絶されていることを嘆き、京の妻女などからの書簡がないことを述べる。自分の帯が

余ることに気づき、また衣服の色褪せに泣く。ふと鏡を覗き込むと頭は白く変貌しており、呆然となる。雁を眼にして旅愁に沈み、更に寒蟬の声が侘びしさを募らせる。孤秋のなか漂う蘭の香りも、秋風に流されて行く。道真はこの地に来て九度の望月を迎えた。居室を清掃して、磬を鳴らすと心が少し落ち着く。門を閉ざす掛け金を外すことさえ物憂く感じられ、彼は「足が自由にならない羊」、また「皮膚を爛れ、攀を患い手足が不自由になった雀」に自分を擬らえる。それでも外の景色を眺めたいし、密かに窓や戸の近辺に行ってみる。秋の澄んだ 気 のなか山々は蒼色に眼を癒し、小川のせせらぎは疲れをひととき忘れさせる。そこにはやがて隈磨と伝承されている「少男」が葬れることになる小山も眼に映っていたはずである。痩せ衰えた身体は格別変わったこともなく、いたわりもせずなおざりにしているのに生命は生かされている。しかし、ここは虚ろで悄気切っている。臉の裏には過ぎ来し方が掠め、涙が止めどもなく流れる。都京に帰ることができるのはいつの日か。故郷である我が庭家にまみえることが叶うのは何時なのか。その京で初めて宮仕えをした日のことを想い起す。次々に過去の栄光が脳裏を駈ける。現実に戻り、道真に割り当てられた居所は、荒海である玄界灘から程近い位置にあり、見窄らしい粗末な茅屋である。謫居は陋屋であるが、自分はこれで十分満足しようと思う。みづからの《いのち》はこの地で終焉するのだろうか。異郷にある人間が、自分の故郷を強く恋いこがれながら死に絶え、異土に骨を埋められる仕儀に戦慄を覚えている。人の世は禍福あざなえる縄の如くあることを身に沁みて知った。命の行く末を誰かに問い糺しても、この千言の詞の裡に思いの丈を語り尽くしても、誰がこの詩句を詠んで心を寄せてくれるだろうか。

485 . 秋夜。九月十五日。

面差しは黄ばみしわがれ囊れはて、頭は霜を置くようである。
 いうまでもなくここ放謫された地は、京から千五百里も隔てている。
 京の地では縛りが多いものだったが、いまは草深い地の囚われ人である。
 月の光は鏡に似ているが、わが清廉潔白を明らかにしてはくれない。
 吹き荒さぶ風は、刀のように我身を切り裂くが、私の憂いを払ってはくれない。
 目にするもの耳にするもの、悉く血が凍るほど身が竦む。
 世のあらゆる《秋》がわたしの身に集約されている感がある。

486 . 「哭奥州籙使君 九月廿二日、四十韻。」

家からの行李に添えた書簡で君が亡くなったことを知った。
 病の源を根治することがあたわず恨みを持つ者の呪いで亡くなってしまった。
 君とは昔日蔵人職として共に奉職したことがあった。
 互いに心の裏表を残り隈なく判っている。
 君は多少剛直すぎる嫌いはあったが、
 曲屈を真っ直ぐに矯め直すことにかけて誰も及ぶ者がいない。
 そんな君が東の果ての陸奥の国に国守受領となって赴いた。
 雪氷を口にし渴きを癒すほどに暇なく碎骨献身し、
 絶えず身に弓矢を帯び巡視を怠らなかつた。
 役人たちは賄賂で職を得た者が多く、
 金銭で人の心を鑱(とる)かされ、骨まで煎られた者が多い。
 土地柄なのか粗雑な布さえ朝貢されない。

幾度となく細美なる絹物を求めたものの…。
上質の金、重ねられた皮衣、
鷹や馬も売り買いされる。
何処で求めることができるのかというと
大半のものは辺鄙な所から来るものである。
辺境に住む者というと、気性が荒く
人性は生来荒々しく、慣れ親しむことが難しい。
売買の価格は法外に高く嵩上げし人を欺こうとする。
その中にも様々な人間が混淆している。
取引でいささかでも間違いがあれば、
彼らの猛々しい気性が頭を擡げる。
古来、辺境の民の争鬪は、
売買交易が発端であった。
たまさか事なきを得ても、
利を増すことは意のままである。
東国の受領たちはすべてに采配を振って都に上る。
彼らは事前に然るべき者に贈賄し、好意を買う。
即ち、官職を買うのである。
税金が年に幾許(いくばく)かということも知らず、
当局の役人は、暦の年月を書き入れる。
人によっては三四枚もの暦を用意し細かに記している。
任果てて京に帰り、賄賂を送り付けた役人たちと同席すると、
公の席でも互いの目を盗み見て訳知り顔に顔き合う。
他日の散財の帳尻合わせを考えるために、
贈賄した者は利を求めて綱紀を揺るがす。
責任者が剛毅で腹の据わった人間であれば
齒軋りして口惜しがることであろう。
必ず事実を見逃さず糺明し、
破廉恥な人間を罰するであろう。
盗人はその主人を憎む。
主人は命を賭し真相を糾明する。
その魂は黄泉の国に行って
拳措進退を見るまでもない。
彼の骸骨は灰燼となって
言葉を発することはない。
彼を葬ってはや百五十日。
此処は彼の地から隔てること三千里
一別以来多くの年月を経た。
君の眠るその地から、この地は如何に多くの山河に屏障されているのか。
想い出されて仕方がない、嘗て君と別離した時のことを。

別離するとき、君が先に亡くなってしまうなど思いもしなかった。
君は静かに黄泉の国に逝ってしまった。
私は激しい運命の急変に見舞われて泥沙にまみれ
西の果ての地と地下の冥界とに別れ、
君の訃報を耳にして以来慟哭が止まらない。
何とか抑え嘗ての君の姿を想う。
そして、君が言い遣した一言が脳裏を掠める。
「君にはひとかたならぬ恩を受けている。
死のうと生きようと君に報いたいと念じている」と。
魂に霊が宿るならば、
旧来の知己を忘れないでほしい。
わたしが本性を持し、
最期に到るまでなにかに寄り掛かることのなからんことを。
神霊となった君が私の中に悪いところがあるのを見たならば、
神鬼のように私を撃ってほしい。
君が私に罪を見い出せないならば、
冥界の正しい審理を希いたい。
神霊の正しい裁きがないならば、
私が語ることは何もない。
口を開けば涙が溢れつらなる。
私の生路はこのようなものである。
君の悲報を耳にし臆(はらわた)が限りなく搔きむしられる思いがする。
冥土の旅路は如何なるものであろうか。
わたしの拙き辞、四百言。
是を以て諫(しのびごと)とする。

以下 次号